The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	見えないものの探求 ： メルロ＝ポンティの存在論と絵画
Author(s)	岩崎, 陽子
Citation	大阪大学, 2002, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/43321
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

【14】

氏　　名	岩　崎　陽　子（いわさき　ようこ）
博士の専攻分野の名称	博　士（文　学）
学　位　記　番　号	第　16704　号
学位授与年月日	平成14年3月25日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当 文学研究科文化表現論専攻
学　位　論　文　名	**見えないものの探求－メルロ＝ポンティの存在論と絵画－**
論　文　審　査　委　員	（主査） 教　授　上倉　庸敬 （副査） 教　授　神林　恒道　　教　授　山形　頼洋　　助教授　藤田　治彦

論　文　内　容　の　要　旨

本論文は、モーリス・メルロ＝ポンティの哲学を手がかりとして、絵画と存在の場で「見えないものとは何か」を問う。A4判、1ページ23行2段組、1行32文字で注もふくめて100ページ、400字詰原稿用紙に換算してほぼ660枚である。

「第一部　表現と身体――『知覚の現象学』における「場」(champ) としての身体――」では、つねに世界へ無言の意味づけを行っている身体の在り方を「場としての身体」と把え、通常には見えないものを感覚可能なものとする行為を「表現」と規定して、その二つが比較されながら検討の俎上に載せられる。言語表現において意味が生じるのは、身体表現において身振りが意味をそのまま提示するのと同様、発話ないし身振りの地平を超出する無言の部分にもとづいている。無言の超出とは「場としての身体」がこうむる変容にほかならない。世界に対する在り方そのものが変化する。そのとき知覚こそ身体が世界にあたえる意味である。こう見きわめたメルロ＝ポンティにおいて、見えないものの内実は、これまでのように「見え『ない』」という否定性の内に葬り去られることなく、見えるものとの関係において把えられるべきだと考えられ始める。

「第二部　見えないものの現われ――『見えるものと見えないもの』における感覚可能なものとイデーの絡み合い――」では、見えないものをイデーと定義したメルロ＝ポンティの論が考察される。そこでは第一部でのように「見えないもの」が、「暗黙の」や「無言の」といった言葉によって不問に付されてはいない。「見えるもの」という感覚可能なものを裏から支えるものとして、「見えないもの」は規定される。その際、重要になるのが「肉」(chair) の概念である。見ることは見られることであるという「肉」の可逆性は、対象のみならず、自己をも生成させる。この「肉」が微妙にずれていくことによって、反省作用の結果、高次の「肉」のレベルにおいて、「見えるもの」と「見えないもの」がともどもに現われるのである。論者は、「見えないもの」についてのメルロ＝ポンティの考えを、サルトルの imagination 論と照らし合わせて、メルロ＝ポンティにおいては、「見えないもの」のうちに「見えるもの」が立ち現れてくることを明らかにし、そこから「見えないもの」の一般的な考察が芸術理論に一定の意義をもつだろうと結論づける。

「第三部　問いかけと絵画――見ることの意味――」は、メルロ＝ポンティの『見えるものと見えないもの』における存在論を絵画論と切り離し難く結び付けて論じている。デカルトの視覚とメルロ＝ポンティの視覚という二種の視覚を対比させて、視覚の在り方としてメルロ＝ポンティ自身が導入した「問いかけ」(interrogation)　という概

念を再検討する。「問いかけ」とは、問いかけることによって自ら自身が問いかけられるということ、事実ではなく個人の経験への問いかけ、そして仕上げられることのない終わりなき問いかけである。論者はこの概念を、存在を描く絵画においても、画家の絵筆の根本的な在り方として注目し、営々と持続される絵画制作の本質を「問いかけるまなざし」と規定して考察を展開する。

論文審査の結果の要旨

本論文は、メルロ＝ポンティから示唆を得て、身体として在るということについての、また知覚という能動性と受動性をあわせもつ人間存在についての、芸術わけても絵画に有効な論理を、見えるものと見えないものの根源に見出している。その結果、見えるものと見えないもののあいだに、絶対的な深淵をではなく、両者をつなぐ軸となるような構造があることを明らかにしてみせた。

絵画における見えるものと見えないものとの関係とは、キャンヴァスや絵の具といった絵画の物質的な存在と、それを越えて感じ取られる内容といったものではなく、見えないものが見えるものを支えているのであり、そのことをメルロ＝ポンティを用いつつ、明確に示したことが、本論文の第一の手柄であろう。見えないものが、見えるものの対立物というより、見えなさそのものとして感じとられる在り方を示していること、それを把えたことが本論文のさまざまに有意義な帰結を引き出したといえる。

見えるものすべてに当てはまるこうした事態は、通常は見過ごされがちであるが、絵画とは、このような見えないものの見えなさを、見えるものを通して現れさせる果てしない試みであると、本論文はいう。結論そのものは穏健なものであるが、その論証は複雑でありながら緻密、性急でなく悠揚せまらざるところがあって納得がいく。抽象絵画を論じた注など、今後の研究にとって有効なヒントも多い。

メルロ＝ポンティの哲学が必ずしも整合的に把えられていないところに欠点はあるが、芸術理論研究としてはそれなりに独創的であり、重厚、首尾一貫している。よって、本論文を博士（文学）の学位を授与するにふさわしいものと認定する。